

令和3年5月28日

南の風 401

南部地区ミニバスケットボール連盟
会長 藤原 敬一

前号の続きです。

結果的にこの準決勝に勝ち、決勝に進むことになるのですが、あの1Qの13対5の場面でタイムアウトをとらなかったことが、正しかったのか結果オーライだったのかは正直分かりません。

因みにこのゲームの頃は、前後半に1回ずつしかタイムアウトが取れない時代でした。

試合後に何名かの指導者の方に、「1Qでリードされた時に、よくタイムアウトを取りませんでしたね。」「あの場面でタイムアウトを取らなかった理由は何ですか。」「タイムアウトを取るか迷いましたか。」など質問されました。

確かに13対5になった時点で、タイムアウトを取る判断もありました。ただ選手の顔つきや様子、プレーの内容（特にオフェンスの流れ）は、決して悪くありませんでした。前号に書いたように、シュートの精度がよくなかっただけだと感じたのです。私はオフェンスが機能しなくなるとディフェンスにも影響が出て危険な状態になると考えています。あの時点でオフェンスの組み立てはしっかりしていたので、ここでベンチがじたばたしてしまえば、返って選手が不安になると思いタイムアウトは取りませんでした。コートの人を信頼し任せようと思ったのです。ただ「シュート時のボールリリースが早いので、あわてずに肘をしっかり伸ばしてからリリースするように」と伝えた覚えはあります。

正解は分かりません。たまたま結果がよかったのかもしれない。このゲームに負けていれば、原因の一つがこの1Qの『13対5』にあったと言えると思います。

ベンチを預かるヘッドコーチは、『ベンチワーク』としてあらゆるリスクに対して瞬時に決断をしなくてはなりません。ここでベンチワークの中でタイムアウトに特化して、私が実際タイムアウトを取る際に指標としていることをまとめてみます。

- ①短時間の内に相手に連続して得点された（6点～8点）場合。特に、プレスを仕掛けられてボール運びが機能しなくなった時など。
- ②オフェンスの組み立てがうまく行かず、ガードが戸惑っているような場合。ワンパターンの攻めになり相手に読まれパスカットされたり、オフボールマンの動きが止まったりしてプレーを立てて見る状態が続いた時。
- ③ディフェンスの足が止まり動きが鈍くなったり、チームの約束（ヘルプやローテ、ボックスアウト）が破綻してしまったりした時。
- ④リバウンド（Off、Defとも）へのモチベーションが下がり、リバウンドに行かなくなってしまうことが続いた時。

このような事態になった時は、タイムアウトを考えます。必ず取るというわけではありませんが、選手の様子や今後のゲーム展開を加味して決断しています。

決断にためらいは禁物です。一瞬の迷いが取り返しのつかないことになるからです。いずれにしてもベンチを預かる監督やコーチは、常に最悪のことを考えて指揮を執らなければならないと思います。